様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２６４

研究課題名（和文）挿入歌を手がかりとした近世英国演劇の文化史的再読可能性に関する研究

研究課題名（英文）A Cultural Study of Songs in Early Modern English Plays

研究代表者
境野　直樹（Sakaino, Naoki）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：９０１８７００５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の3点に要約できる。１.楽曲がもつ文字とは異なる楽譜という異質で高度な伝達形式に依存する性格、書記による体験の共有の困難さを利用して、演劇は、舞台は版本にたいする優位性を保とうとした。2. 挿入歌は韻律、メロディ、演奏形態などの制約を通じて、主として喜劇作品において、身体性に依存しようとする道化役者の暴走を制御した可能性がある。3. 挿入歌は劇の中にありながら、プロットの外、観客の「いま」への参照性も付与されている。このことにより、台詞の言外の意味作用（パロディ、アイロニー、諷刺）の効果が醸し出される可能性も少なくない。

研究成果の概要（英文）：Major findings of this study are as follows: 1. Due to yet unstable system of musical notation those days, dramas introducing numbers of songs have their difficulties to be circulated into “reading” public, which might have guaranteed the superiority of stage over page at least for limited time of early modern era. 2. Songs, because of their requirement of performers’ observing rhyme and melodies, might effectively put under control otherwise possibly excessive comical improvisation by actors with clown parts. 3. While as a part of dramas, inserted songs, with their current circulation per se, sometimes take the audience outside the plot of the plays. As a result, various forms of ironies, multiple meanings, parodies and satire would reasonably be imposed, which should give plays a kind of richness.

研究分野：近世英文学

キーワード：演劇　シェイクスピア

１．　研究開始当初の背景

たとえばシェイクスピアの『十二夜』幕切れのフェステの歌が、劇の祝祭から「毎日雨」の日常へと観客を引き戻す機能を果たす(E.S. Donno, 1985)という見解は、あの歌がどんなメロディでどういう形態で演奏されたのか–たとえば長調なのか短調なのか、クルムホルンのアンサンブルが伴奏か、それともリュート歌曲なのか–という考察を欠いている。無理もない。現存する最古の記録は 1772 年、つまりすでに同時代性を喪失した上演記録であり、劇作家（あるいは劇団）が当初想定し演奏した挿入歌は再現できないからだ。『リア王』の道化の歌ともあきらかに呼応する歌詞をもつこの歌には、仮にオリジナルの楽曲が特定でき、その曲そのものの当時の社会での流通状況が判明すれば、劇の受容のありかたに少なからず軌道修正を迫る可能性があるのだが、残念ながら現状では上演史はオリジナルの楽曲の記憶をほぼ完全に喪失してしまっている。

こうしたことが実はシェイクスピア作品のほとんどの挿入歌について言える状況であることを、わたしたちは Bryan N.S. Gooch, David Thatcher, *A Shakespeare Music Catalogue*, 5 vols. (OUP, 1991)から知ることができる。シェイクスピアに限らず、近世英国演劇の挿入歌の多くについて、初演当時の楽曲の記録は残っていない。それゆえにわたしたちは、現存する歌詞のみをたよりに、本来「マルチメディア」たるはずの演劇を再構成するほかはない。現代の近世初期英国演劇の上演においては、挿入歌と演劇作品本体との有機的関係はかくも分断されてしまっており、それゆえ研究の手がかりを得にくい状況が続いている。

だが研究代表者は平成 21～23 年度科学研究費助成事業基盤研究 C（課題番号：21520230）において、『お気に召すまま』の譜面が現存する挿入歌 'It was a lover and his lass'を手がかりに同時代の楽譜を精査し、①それがリュートおよびヴィオール属による whole consort であるために大衆劇場での上演が音量的に困難であることを確認したうえで、②劇中の多くの歌のパートを担当した役者が Amiens を演じる Robert Armin であるならば、挿入歌は宮廷仮面劇さながらに、劇の地のパートと有機的に関与しうること、さらに③知的に洗練された舞台での道化の機能が、William Kemp に代表される身体性から Armin による歌曲へと推移した可能性を指摘した。この考察は、1972 年の W. Ringler, S. May による仮説を踏まえた Juliet Dusinberre(2006)による、Henry Stanford の *Commonplace book* 所収のエピローグの存在が、*As You Like It* が 1599 年 2 月 20 日のリッチモンド・パレスでの女王御前上演を示唆するという説を補強しうるものである。この知見は、1980 年代の新歴史主義を代表する論文、Louis Montrose, " 'The place of a brother' in *As You Like It*: Social Process and Comic Form,"(*Shakespeare Quarterly* 32, 1981), 28-54 に展開される、演劇が大衆劇場に押しかけた貧困層の若者の社会への不満に対する安全弁として機能したという主張を根底から覆すものである。さらに King's Men の新しい「歌える」道化 Armin は、『十二夜』のフェステも演じたはずである。このようにわずか二つのシェイクスピア喜劇を例に取っただけでも、挿入歌を劇団員の構成や舞台構造との関係から見直すだけで、作品の受容について従前とは大きく異なる状況、演劇と社会の相互参照に基づいた新しい角度からの作品読解が提案可能で、英文学史・文化史に新しい視点を提供できることがわかる。

２．研究の目的

近世英国演劇をその社会的文脈を考慮しつつ再読する試みは、新歴史主義批評以降多様な展開を見せているが、上演史を繙くまでもなく劇中音楽、とりわけ挿入歌についてはその特定すらほとんどなされておらず、いわんや演奏形態、効果についての体系的研究は皆無である。だが研究代表者は、挿入歌の歴史性を研究することで、劇そのものの上演形態や想定される聴衆･観客層、劇場のサイズについての知見を得ることが可能であることを立証しつつある。本研究はそれを深化させ、個々の戯曲の道徳的・政治的視点にたいして多様な影響力を及ぼしつつ、生きた文脈として演劇の受容に作用する挿入歌の機能を解明することを目的とする。

３．研究の方法

演劇作品内の詩を歌詞とする楽曲について、同じ旋律を持つものを集約し、出典や演奏形態についてデータベース化をすすめている。これにもとづき大衆劇場で演奏可能か、private theatre 向きか、少年劇団のパフォーマンスか、などの上演環境に関する情報を得たり、作品外の社会での流通状況を手がかりに、戯曲と社会の双方向的影響関係を考察する。これには､‘Still Musick’などのト書きにおける「劇中音楽」の考察も含まれるが、重要なのは、あくまでも歌詞（つまり台本にあることば）を手がかりとして、同時代の音楽が演劇に組み入れられる力学を考察するという点である。対象はイングリッシュ・オペラ前夜､John Gay の Beggars Opera までの近世英国演劇全般に及ぶ。

A Short-Title Catalogue of Music Printed before 1825 が網羅する以前の楽曲のうち、さまざまな記譜法で記録され、それゆえ体系的にまとめられていない楽曲について、劇の挿入歌の歌詞を保持しているものを手がかりとしてクロス・インデックスを作成する。既に一部の歌曲については、器楽曲として広く流通していたものが多数含まれることを、H.M. Brown, *Instrumental Music Printed Before 1600* (Harvard UP, 1967)などで確認しており、たとえばシェイクスピアやジョンソンの作品については、Orlando Gibbons のマドリガル集などにも手がかりを求めることができそうなケースが散見されるが、そういったことは音符と歌詞、演奏形態などあらゆる要素を横断的に精査できるデータベースの構築なしには検証しえないことである。

こうした、研究のためのインフラ整備に加えて、劇中音楽について具体的で信用できる記録が増えてくる 18 世紀以降の演劇作品を、バロックオペラから 19 世紀メロドラマにいたる、もうひとつの演劇史の精査を通じて、挿入歌の文学史とでもいうべき文化史を再検討し、前述の「喪失された挿入歌群」の考証に無用なアナクロニズムが紛れ込まないよう詳細な検証を行うことが、本研究の方法論上の重要なポイントとなった

４．研究成果

研究初年度は、前年度までのリサーチに積み上げるかたちで、既に構築・運用しているデータベースシステムの充実に充てた。

岡本,鳴島,市川,加藤,小林,鹿島『エリザベス朝ト書きデータベース』(http://130.158.228.38)を参考にしつつ、音楽に関係するト書きから舞台に付随する演奏形態や規模と舞台構造、観客層についての仮説を導く方法論について考えた。

シェイクスピアおよびジョンソンの喜劇作品２ないし 3 編について、具体的な考察を行うことで、blank verse と音楽性の問題から劇作家のスタイルの変容を上演に纏わる諸条件との関係から、あるいはまた、

台詞の「リアリティ」をいかに支えるかという劇作家の問題意識の反映の観点から、挿入歌の存在意義を考察した。

研究二年目に主として行った研究は以下のとおり。演劇作品の挿入歌についての情報は、1750 年前後から急激に充実してくる。楽譜の入手も容易になり、歌曲が演劇から離れて社会に受容されてゆく記録も質・量ともに格段に増える。そこで研究 2 年目は、これらの膨大な資料をデータベースに入力しつつ精査することになった。前年度の研究成果を踏まえて予想される論点としては、既存のバラッドの旋律が演劇に援用され挿入歌を形成するのか（吸収型）、劇中歌が舞台から社会へと拡散してゆくのか（拡散型）による演劇と社会の双方向性が論じられるとき、戯曲はいわば「書かれっぱなし」の閉じたテクストではなく、常にそれを受容する社会との共振関係とともに変容する「書かれ続ける」開かれたテクストとして立ち起こってくる文化現象として捉え直す必要があるということであった。この年度においては、データの信頼性確保の観点から、渡英してケンブリッジ大学 Fitzwilliam Museum や大英図書館での楽譜資料のリサーチも行うことができた。

上述の双方向性のプロセスにおいて懸念されるべきこととして、楽曲が舞台を追い抜く–つまりプロットとのつながりが希薄になってゆく–現象について、どうしても考察を加える必要性に直面することとなった。それはパーセルのオペラの隆盛と時期的に、皮肉にも呼応する。挿入歌はオペラの成り立ちにどうかかわるのか。この問題にとりくむべく、研究最終年度は主として挿入歌と戯曲本体の乖離のメカニズムについて考察することとなった。その際鍵となった作品は、John Gay, *Beggars Opera* である。同戯曲には明白に切り分けられた二つの次元が存在する。時に苛烈な現実と、歌が横溢するファンタジーの世界である。プロットを駆動する世界の問題が、最終的には音楽に、歌に呑み込まれるように解きほぐされてゆく構造をもつこの芝居が、英国演劇における挿入歌の機能の行き着く果てだとしたら、そこから振り返ったとき、挿入歌の始原はどう捉え直されるべきなのか。研究最終年度は、こうした通史的視座の獲得を最終的な目標に設定して研究を進めることとなった。

考慮すべきいまひとつの問題は、戯曲の文体の変容である。イングリッシュ・オペラとヒロイック・カプレットの関係は、劇のリアリズムを犠牲にしてまで情緒の高揚感を前面に出すスタイルの選択を意味するだろう。そのとき詩の音楽性はいわば遍在する自明のものとなり、挿入歌の劇的効果は極小となる。18 世紀のメロドラマが、異化されるべき時空を持たないことによる独特の閉塞性に特徴づけられていることを、挿入歌の機能を手がかりに改めて考察することも、ジャンルとしての演劇の衰退を考える上で有効であった。のみならず、上演の社会史の側からも、看過できない事情があった。すなわちライセンスを持たない劇場で演劇作品を上演するための「抜け道」としての挿入歌の機能である。ここにいたり、内発的必然性を喪失した挿入歌は、スペクタクルのためのプロットとともに、ジャンルとしての演劇の文学的価値の衰退の指標として、その意義を喪失してゆく。それはまた、演劇が文学の「本流」から絶縁されようとする契機でもあった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

１．境野直樹　近世初期英文学におけるエコーの系譜についての覚え書き　『岩手大学英語教育論集』No. 16, 2014, 59-72.査読無

６．研究組織
(1)研究代表者
境野　直樹（SAKAINO, Naoki）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：90187005